

第3回 Better Life 研究会 (2020年3月18日開催)

「地域共生とインクルーシブ」

馬場拓也 委員 (社会福祉法人愛川舜寿会常務理事)

私は2010年に福祉業界に入りまして、今年で10年になります。

1992年に父が法人を立ち上げました。私は二代目で特別養護老人ホーム「ミノワホーム」を経営しています。また2019年に「凸凹保育園」も立ち上げました。

ミノワホームには壁が80mほどありました。昔は「認知症の人が、帰宅願望で帰ってしまう」「門を閉めていたのに、おばあちゃんが壁を乗り越えていった」という話を聞かされると、「やっぱり介護施設って難しいな」と考えていました。しかし、きっかけとなったのは、実は加藤委員の施設(あおいけあ)に訪問した際に、一般の人が通り抜けているのを見たときに、まさに青天の霹靂でした。「うちでもできる」と思いました。



地域と施設の精神的距離を考えよう、ということで、2016年に大学生、造園家、庭造りの職人などを交えて、施設と地域との精神的な距離をデザインから変えていくというプロジェクトを作りました。しかし、2016年7月26日に「相模原障害施設19人殺傷事件」がミノワホームのすぐ近くで起きました。当然、反対意見やセキュリティへの不安

の声も出ました。しかし、あの事件の犯人は施設の元職員です。社会の中で「こっちが施設、こっちが地域」という「分断」を感じる空間的作用は大きいんじゃないかと感じ、「福祉と地域の壁を壊す」ことを決めました。

8月に実際にハンマーで壁を壊しました。分厚い壁がドーンとぶっ壊れる風景だけでも結構ぞくぞくしました。地域の人から「ミノワホームどうしたの？立替え？」と聞かれたので、私が「立替じゃなくて壁をとっ払うんです」と話したら、興味を持ってくれた方もいました。

10月に回覧板で「私たち『福祉施設』は壁の向こう側ではありません。この地域の中にいます」というメッセージをそえて庭びらきを地域の回覧板やSNSで知らせました。来てくれたおじさんが「おとなしいと思っていたミノワホームという介護施設が、なんか動き出したな」と言ってくれました。夜明けという感じがしました。

以前のように壁で見えなくなってしまう社会は非常にリスクがあって、「道に飛び出して事故につながる」というリスクとは違う、もっと根深いリスクがあるんじゃないか、と感じました。そこで、町の人に散歩などの際にこの庭で、ちょっと腰を掛けてひと休みしてもらいたいと、庭を「ミノワ座ガーデン」と名付けました。いろんなことが展開されていきました。空間が変わるとみんなの思考が変わり、庭でなにかやろう、ということが増えていきました。



一般的に子どもが介護施設に入ることによってセンシティブになってしまいますが、うちではどんどん施設に入ってもらっています。言わずとも、子どもたちも「お年寄りにぶつかるから、ここでは走っちゃいけない」と判っていて、相互の学びの場になっています。このように、福祉・介護の営みや介護福祉士、車椅子の人が“緩やかに”見える関係性ということは、子どもたちや地域社会にとって、意味があると思うのです。

2019年に「凸凹（でこぼこ）保育園」という保育園を立ち上げました。誰しも持っている凸（自分の強み、長所）に注目し、誰しも持っている凹（自分の弱み、短所）をみんなで埋め合おうということでこの名前にしました。

今、保育園の数はこの数年間でもものすごく伸びています。これだけ増えている中で本当に質の高い保育ができるかという問題は絶対出てきます。どういうフィールドで保育園を運営するか考えたときに、厚木市の認可保育園としては駅から最も遠いところですが、お寺やすごくきれいな田園がある場所で保育をやろうと決めました。



凸凹保育園のコンセプトとして「建築空間」ということを掲げました。「建築は第三の教師」とも言われます。イタリアのロτζアという「半屋外空間」を日本建築に読み替えると「縁側」にあたり、回廊型の富山県高岡の瑞龍寺の「伽藍配置」からの着想で建築家との打ち合わせが続きました。廊でつながり、屋外でも屋内でもない「中間領域」を作り、そこで異年齢が会っていくという狙いです。

床は、フローリングではなく、気持ちいい杉材にこだわりました。現代の建築は気密性と断熱性競争のような側面もありますが、逆に気密性が薄ければ、そこからほどよい湿度が入ってきてハウスダストも軽減され、アレルギーを防げるかもしれません。本来、人はそうして四季や自然と調和してきたはずだからです。開園1か月くらいした5月、気持ちいい風と日差しを浴びて、お部屋ではなく廊下に寝てしまう子が出てきました。

それから、子どもたちがいろんな遊びを勝手にやりだしました。うちの保育士たちは見守っています。「あの子は何を考えているんだろう」と、その時々「こころもち」を「観察」していくこと。それだけで保育士はすでに半分以上の保育士の役割が果たしているといっても過言ではないのです。子どもたちは自分たちで選び、自分たちで成功をつかみ取るようになっていきます。これを「自己教育力」といいます。



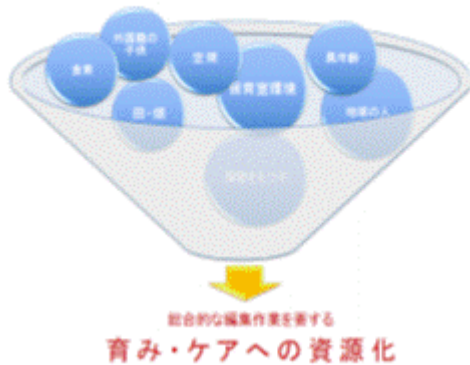
われわれのこだわりは「閉じない」と

いうことですので、地域との交流の場をできるだけ多く作っていきました。地域の人を園の中に入れるのは危ない、という人がいますが、リスクのない社会は超ハイリスクです。リスクをどう理解していくのかというのは、高齢者の施設も保育も全く一緒だったということがこの一年間で判りました。

また、凸凹保育園は「障がいや『異なり』で分けない」という理念を信じています。障がいや国籍等の「異なり」で分けてしまうことは非常にリスクーだと思ってます。実に10か国の子供たちが一緒に過ごしていますが、子どもたちはノンバーバルコミュニケーションで非常に仲良く関わりはじめます。最初のうちは国のなまりがありますが、1年経つとネイティブな日本語を話します。

保育園という福祉施設には可能性があり、子どもではなく、大人の意識次第で、インクルーシブという言葉にふさわしい現場とその価値が構築されていくと考えています。

多様なファクターとの連関



最後になりますが、いろいろなファクターとの連関が、ケアの資源になっています。これからは、高齢者の財源で子どもが元気になる、あるいは保育園の財源で高齢者が元気になる、というシナジー、重なりによる共生があり得ます。それをどうやって作っていくかというのは、事業者の覚悟だけだと思います。

<文責：全労済協会調査研究部>